

おそろいのサリーを着る

—ネパールにおけるネワールの祭礼から—

三木陽子*

2022年8月5日、わたしはネパールのパタン¹⁾に位置する、とある寺院（以下、A寺院）を訪れた。わたしがホームステイをする家族のお父さん（Hさん）とお母さん（Kさん）が参加する「家族のお祭り」が、この場所で行われるためである。「この祭りでは、みんな同じサリーを着るよ」と、同居するHさんの長男の妻（Rさん）に教えてもらった。ネパールの人びとの装いを研究するわたしは、サリーが見たくてHさんたちについて行くことにした。

ネワールのグティ

ネパールにいた2ヵ月間、わたしはネワールの人びとの家に滞在した。ネワールは、カトマンズ盆地の先住民として知られており、古代より都市文明を築き上げてきた。ネワールにはヒンドゥー教徒と仏教徒が存在し、それぞれの宗教ごとにカーストが存在する。わたしがお世話になった家は、ネワールの仏教

徒のなかでも高カーストに位置するシャツキヤの人びとの家であった。また、ネワールにはグティという共同体（儀礼執行集団）が存在する。Hさんたちの説明によると、グティはネワールの同じカーストかつ近隣住民で構成されている。そして、1世帯につき1人がグティに入る。グティに入るメンバーは、一家の年長男性と決まっている。²⁾グティのなかで儀礼が行われる場合、グティに所属する男性とその世帯の成員が参加をする。今回の「家族のお祭り」は、A寺院の近隣住民で構成されたグティによって催されるものであった。HさんはA寺院の近所で生まれ、このグティのメンバーである。そのため、妻であるKさんも一緒に祭りに同行した。³⁾

パンチャ・ダーン

朝8時過ぎ頃、朝食を済ませ、出かける支度をする。玄関に行くと、普段は綿製のクルタ・スルワール⁴⁾を着ているKさんが、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) パタン（正式名称：ラリトプール）は、ネパールの首都カトマンズ市の隣に位置する市である。

2) ここでいう1世帯とは、Hさんによると「住居と食事を同じくする家族」のこと。言い換えれば、「カマドを共通にする日常生活単位」[石井1976:140]である。女性は、結婚するまでは父親のグティに所属するが、結婚後は夫の両親と一緒に住むことが多いため、義父あるいは夫（義父がない場合）のグティに所属する。

3) Hさん（60代）とKさん（60代）以外にも、長男（40代）、長男の妻（40代、Rさん）、長男夫婦の娘（12歳）、息子（6歳）も同じ家に住んでいた。だが、この日は平日ということもあり、長男とRさんは仕事、その娘と息子は学校で参加することができなかった。

鮮やかな赤い布地に金の刺繍が入ったサリーを着ていた。Hさんは既にA寺院にいるらしく、わたしたちもタクシーで急いで向かった。A寺院近くのコートヤードでおり、建物のなかに入る。部屋の真ん中では、大小さまざまな鍋を囲んで、女性たちが談笑しながらマルパ⁵⁾を揚げている。部屋の隅では、男性が食材を洗ったり、キール⁶⁾を煮詰めたりしている。Hさんもキュウリを切っていた。

この「家族の祭り」の名前は「パンチャ・ダーン」(*panca dān*)という。1年に一度、グティのなかの「家族」(*pariwar*)たちで食事を作るのだそう。彼らは食事と5種類の供物(米、小麦、豆、塩、お金)をグティの年長者(70、80代以上)や神様に配る。ここでいう「家族」とは、Hさんの父方祖父の子孫たちとその妻子を指している。パン

チャ・ダーンに参加する女性たちは、彼女らがネパール語で「家族のサリー」(*pariwar ko sāḍī*)と呼ぶお揃いのサリーを着て供物を配る。Kさんが着ていたサリーも、この「家族のサリー」であった。

11時頃、食事を作り終えた女性たちはお揃いの「家族のサリー」に着替えた。そして、コートヤードに建てられたグティの年長者が待つテントに向かう。年長者は大体30人ほど。コの字型に置かれたテーブルを前に座っていた。女性たちは、供物をバケツに入れて列になる。順番に年長者の前に立ち、年長者の目の前の皿に供物を入れていく。年長者全員に配り終わった後、A寺院の神様にも供物を配りに行った。寺院には家族以外の人たちもお参りに来ており、寺院のなかは人でごった返していた。はぐれないように、わた



写真1 料理を作る「家族」の人びと



写真2 グティの年長者に供物を配る女性たち
左～真ん中に写る4人の女性が「家族のサリー」を着ている

- 4) クルタ・スルワールとは、丈の長いチュニック(クルタ)とゆったりとしたパンツ(スルワール)の組み合わせから成る。一般的に、ドゥバターというショールと合わせて着用される。
- 5) マルパとは、小麦粉や牛乳(もしくは水)、砂糖、スパイスなどを混ぜた生地を油で揚げたお菓子。プジャ(お祈り、儀礼)の日に食べる特別な料理のひとつ。
- 6) キールとは、甘い牛乳粥のこと。マルパと同様にキールも、プジャや祭礼の際に食べる特別な料理。

しは赤いサリーの後ろを必死に追いかけた。

サリーの位置づけの変化

神様への供物を配り終わると、女性たちはふたたびコートヤードに戻ってきた。そして、「家族」のみんなで作った食事を「家族」のメンバーやグティの年長者たちなどに提供した。ひと段落つくと、「家族」のみんなも食事をしはじめた。わたしは、KさんとKさんの娘（30代）と一緒にイスに座ってご飯を食べた。

わたしはKさんに、いつからお揃いのサリーを着るようになったのかを尋ねた。Kさんによると、4年前に「家族」の女性たちでお揃いのサリーを購入し、それ以降パンチャ・ダーンの時はこのサリーを着るようになったという。以前は、各々が自分の持っているサリーを着ていたようである。

Kさんは、今では毎日クルタ・スルワール



写真3 作った食事をふるまう「家族」の男性たち
男性たちは普段着と変わらない洋服を着ている

を着ているが、以前は毎日サリーを着ていたとも語った。18歳の時に結婚してから、毎日綿製のサリーを着ていたという。1990年代頃からクルタ・スルワールを着る女性たちが増えはじめ、Kさんも1996年にはクルタ・スルワールを日常的に着はじめた。義母もずっとサリーを着ていたため、クルタ・スルワールを着はじめたKさんを見て、「何その服!」と驚愕していたそう。

今ではすっかり、既婚女性の日常着としてクルタ・スルワールは定着し、サリーを日常的に着る人は高齢女性にしかみられない。しかし、祭礼やパーティの際の晴れ着としてサリーを着る女性は、現在でも若者からお年寄りまで幅広くいる。つまり、過去数十年のあいだに、サリーは既婚女性の日常着から、晴れ着としての役割に移り変わっていったのである。⁷⁾ また、着用場面が変わることによって、女性たちが着用するサリーも、汗を吸いやすく速乾性が高い綿製のサリーから、より美しく見えるシルクなどの光沢感のあるサリーに変化していった。

日常着から晴れ着へというサリーの位置づけの変化とともに、今回のパンチャ・ダーンでみられた「家族のサリー」が登場したと考えられる。特別な時にしかサリーは着られなくなったからこそ、着用される場面に応じた特別な意味がサリーに与えられるようになったのだろう。グティのなかの同じ父系親族集団、本稿でいう「家族」が共同ではたらくこのパンチャ・ダーンにおいて、お揃いのサ

7) インドでも、ネパールと同じように、シャルワールカミーズ（クルタ・スルワール）の普及、日常着としてのサリー離れ、サリーのブランド化（＝晴れ着としてのサリーの着用）がみられる [杉本 2020: 31-32]。

リーは、「家族」のつながりを着用者の女性たちに強く意識させ、同じ「家族」であることを成員の内外に示すシンボルのようにはたらいていた。

「わたしはサリーが大好き。『そんなに着ないでしょ』って言われるくらい、たくさん持っています。」普段、洋服を着て過ごしているRさん(Hさんの長男の妻)はこう語っていた。サリーは、日常着としての役割は失われつつあるが、着用者をより美しく見せる衣服としての役割を保っている。彼女たちがサリーに魅了され続ける限り、サリーは場面

に応じて意味を変え、ネパールの女性たちに着用され続けるのだろう。

引用文献

- 石井 溥. 1976. 「ネワール村落調査報告(3) — ネワール村落における家族」『アジア・アフリカ言語文化研究』12: 139-170.
- 杉本星子. 2020. 「グローバル経済とナショナル・ドレスのファッション・トレンド—インド・ウエスタンとGIプロダクトサリーをめぐる」帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範3「伝統」と「ナショナル」を問い直す』京都大学東南アジア地域研究研究所, 29-39.

告白に使われた口琴の行方

三宅千夏*

「ラオヤほかの民族の楽器はただ大きな音になるだけだ。この口琴のように物語は話せない。」ラオスで会ったモン族の口琴職人は笑いながらそう言った。

「口琴」という楽器をご存知だろうか。小さな板や枠に付いている弁を、紐を引いたり指で弾いたりして振動させ、その振動を演奏者の口から体内に響かせて音を出す楽器である。音階はなく、口の大きさや舌の動きなどで音の高低や音色を変化させる。マイナーな楽器だが、世界に広く分布しており、それぞ

れの地域で形や素材、演奏方法が異なる。日本では、アイヌ民族のムックリが有名で、風の音や熊の鳴き声など自然界の音を表現する。そんな口琴が私のフィールドであるラオスにもあるという話を聞いていたため、調査の傍ら口琴に関する情報も収集していた。目撃情報をもとに最初に見つけたのは、首都ビエンチャンのショッピングモール2階モン族楽器店のガラスケースの中にある、ピンク色の竹筒に入った口琴だった(写真1)。紙の栓を抜き、10センチメートルほどの竹筒

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科